

## H 2 5 試験研究課題評価一覧（概要）

部会	評価区分	試験研究課題名	部会評価	外部評価	試験期間	対処方法
農産	事前	大豆圃場における帰化アサガオ類防除技術の確立	A	A	H26～28	本県における帰化アサガオ類の発生消長を明らかにしたうえで、他機関の成果を活用して、効率的に研究を進める。
〃	事前	アカスジカスミカメの防除方法確立試験	A	A	H26～28	効果的な防除時期、薬剤の選定を行ない、剤型等も考慮したトゲシラホシ・アカヒゲとの総合的な防除体系の確立を目指す。
〃	中間	木質系堆肥等を活用した新たな有機物施用方法の確立	A	A	H23～27	マメ科緑肥に対するイネ科緑肥や木質系堆肥の施用割合について、C/N比を基本指標に研究を推進する。
〃	事後	ケイ酸質資材施用による土壌生産力の向上	A	A	H23～24	土壌診断に基づく適切な土壌改良が進められるよう、現場での資材施用を支援。資材の効率的な施用方法について、関連の試験課題に取り組んでいる
〃	追跡	大豆新奨励品種「シュウレイ」	a	a	H17～22	シュウレイの裂皮粒発生、葉焼病対策について、栽培、予防薬剤の面から検討中である。
園芸	事前	次世代型土壌病害診断・対策支援技術の開発	A	A	H25～27	参画機関と連携を密にし、よりよい研究成果が得られるようにチームを組んでいきたい。また、評価法とともに対策技術メニューを示していきたい。
〃	事前	ニホンナシ「あきづき」の果肉障害対策技術の開発	A	A	H26～30	発生要因（樹体内水分ストレス等）と障害発生との関係を解明し、(独)果樹研等とも連携、協力し、研究を推進する。
〃	中間	チューリップ病害に対する品種抵抗性等を活用した制御技術の開発	A	A	H23～27	活用できる研究成果は迅速に公表していきたい。また、育種分野との連携を十分に行い、県育成品種球根の抵抗性付与技術に活用していきたい。
〃	事後	短葉性ネギの水田転換畑における7～10月どり栽培技術の現地実証と市場性評価	A	A	H22～24	短葉性ネギを用いた多様なメニューで県民の食材としての定着化を図っていくとともに、開発技術について栽培マニュアルを作成し、普及につなげていく。

〃	追跡	ニホンナシの間植樹の生育促進技術の確立	b	a	H19～22	効率的な改植方法として生産現場で活用され、園地の若返りに貢献しており、さらに当該技術の普及に努める。
畜産	事前	超音波診断による黒毛和種肥育牛及び繁殖牛の肉質推定技術の確立	A	A	H26～28	肥育期間中の肉質の発達や出荷前の肉質を明らかにすることにより、最適な肉質の肥育牛出荷を可能にする。
〃	事前	新系統豚を利用した繁殖豚の生産性向上技術の確立	A	A	H26～28	肉豚の生産性の向上を図るため、子豚のストレス軽減および肉豚への未利用資源の利用についても実施する。
〃	事前	酪農経営における後継雌牛の効率的確保技術体系の確立	A	A	H26～28	判別受精卵の凍結・融解技術を検討し、受精卵移植の現場で融解・移植を可能とする手法を開発し、現場での取組の利便性を高めるとともに、受胎率の向上を目指す。
〃	事後	加齢に伴う繁殖牛の生産性低下の実態解明と抑制技術の開発	A	A	H22～24	開発した過剰排卵処理法は、現場での作業を軽減する方法であり、採卵を希望する和牛繁殖農家での実用化技術として普及していく。
食品加工	事前	発芽大麦の開発と機能性レトルト米飯への利用	A	A	H26～28	今回開発を目指す発芽大麦は、レトルト米飯、粥などへの利用に的を絞って取り組む。
〃	事前	とやま特産物ソーセージの開発	A	A	H26～28	県内畜産加工業者を中心として、水産加工、農産加工などの様々な業者との業者間連携を取りながら製品化を図っていく。
〃	事後	膜分離技術を用いたシラエビ加工廃液の有効利用技術の開発	A	A	H22～24	麺類のスープや米菓などの特産加工食品の調味料としての利用や郷土料理への応用など、今後、様々な利用を提案していく。
林業	事前	スギ林分における発電用木質バイオマス生産量予測モデルの開発	A	A	H26～28	実際に行われる作業工程を既存システムに組み込み、一定の成果が得られたモデルから随時提供していく。
〃	事前	エノキタケ・シイタケの優良系統選抜・保護に向けたDNA解析技術の開発	A	A	H26～28	エノキタケ優良系統の選抜及び登録品種の品種識別に焦点を集中して定めて開発に取り組む。

〃	事前	製材等部材の現場型非破壊検査ツールの開発	A	A	H26~28	県産材の品質管理・信頼性向上に必要であることから、普及方法を検討しつつ、確実に推進する。
〃	事後	住宅用制振パネル工法の汎用化技術の開発	A	A	H22~24	色々な業者が使えるように汎用性の高い技術として普及に努める。
水産	事前	海の森づくり推進のための技術開発研究	A	A	H26~30	既存のデータを活用しつつ、中長期的な藻場の動向を明らかにしていく。 藻場海藻の培養技術の成果を積極的に関係者に提供し、藻場保全活動に生かしていく。
〃	事前	優良サクラマス親魚養成・回帰技術向上調査研究	A	A	H26~30	有識者や関係者等の意見を聞きながら、他機関とも連携し、親魚養成技術を高め、漁協の要望に応えるよう努めていく。 漁協や河川管理者との連携を図り、河川環境の改善を進めるよう努めていく。
〃	中間	沿岸定着性魚類の種苗生産安定化技術開発研究	A	B	H23~27	種苗生産試験の結果を検証し、技術を確立するとともに、標識放流試験を継続し放流効果の推定に努めていく。 飼育の過程で得られる知見が資源生態の解明等に繋がるよう研究を進めていく。

## 評価の区分

- (1) 事前評価：新規に実施しようとする課題について、必要性や貢献可能性、研究内容が適切であるか等について予算要求前に評価を行う。
- (2) 中間評価：原則として5年以上の期間にわたる課題について、原則として開始後3年目毎に試験研究の進捗状況、社会情勢の変化等を踏まえ、研究内容が適切であるか等について評価を行う。
- (3) 事後評価：試験研究が終了した課題について、原則として終了年度にその研究成果について評価を行う。
- (4) 追跡評価：試験研究が終了した課題について、終了後数年後にその研究成果の普及状況や貢献度について評価を行う。

## 部会・外部委員会評価における評価基準

	事前評価	中間評価	事後評価		追跡評価
A	優れている	優れている	優れた成果が得られた	a	貢献度は高い

B	妥当	妥当	良好な成果が得られた	b	貢献度は妥当
C	部分的見直しが必要	部分的見直しが必要	予定された成果にはやや至らなかった	c	貢献度はやや低い
D	全面的見直しが必要	全面的見直しが必要	それほどの成果が得られなかった	d	貢献度は低い
E	実施せず	中止	成果が得られなかった	e	貢献度は非常に低い